

1

キャサリンのようにはなりたくない。

少年は無我夢中で走った。

キャサリンはかつて少年の憧れであった。

けして誰か一人のものにはならない。誰にも屈せず誰にも媚びない。男たちに抱かれているのではなく男たちを抱いてやっているのだ。緩く波打った長い金の髪に豊満な白い胸のキャサリン——気高く美しいキャサリン、十三番街でも指折りの高級娼婦で、『中』の連中さえ彼女と一夜を共にするため大枚をはたくという。

今となつては、もう、昔の話だ。

——アンタちよつと行って買ってきて。

そう言つて皺くちゃの紙幣を差し出した女は、落

ち窪んだ眼窩に瘦せた胸をしていた。寝間着代わりに振り撒いていた香水ではなく安い化粧品臭いがした。

——お願いよお、もう切れてきちゃつたの。次を買つてきてちょうだい……お願い……。

阿片を買う金を捻出するため、長かった金の髪を切つて売り、『中』の男の愛人に成り下がったあの女を、憧れのキャサリンと同じ人物とは認めたくない。突然視界が崩れた。目線の先にあつたはずのガス燈の明かりが消え、足元にあつたはずの石畳が目の前に近づいた。

強かに顎を打つ。石畳の湿った質感が不快だ。

転んだ。

堪らなく惨めだと思つた。商売道具である顔に傷をつけてまで自分はいつたい何をしているのだろう。同じ春をひさぐ者としてキャサリンのように気高く美しくありたいと思つていた。だが、今の少年に

は気高さも美しさもない。霧なのか犬の小便なのか
知れない水分で湿った石畳にしがみついて体を起こ
そうともがく、そんな今の少年の姿はきつと滑稽で
しかない。

何もないところで転んだのはすでに限界が近いか
らだろう。両足は疲労を訴えていた。立ち上がるだ
けで筋が悲鳴を上げる。腕の傷からも焼けるような
痛みが消えない。

それでも、走らなければならぬ。

商品が逃げ出したことを知って十三番街の元締め
であるエインズワースの一味の者たちが追い掛けて
きている。

マフィアに戻りたくない。

キャサリンと同じになりたくない。

明日の金と阿片の残りを気にしながら男に縋りつ
く暮らしはしたくない。

どこかへ逃げなければならぬ。

しかし、どこへ、だろう。

ふと目をやったら、すぐその家の戸が開いてい
ることに気づいた。

何かの罫かもしれないと、思わなかったわけでは
なかった。このご時世だというのに、家に施錠もせ
ず平穩無事に暮らすのなど、あり得ない。獲物がか
かるのを待っているのかもしれない。

だが、次の時には、少年はその家に飛び込んでい
た。

いずれにせよこのままでは組織に何をされるか分
からない。一味の身内の手にかかるか、まったく見
知らぬ者たちの手にかかるか、どちらにしても辿る
末路は一緒だ。それならば、いちかばちか飛び込ん
でみて、今をどうにかやり過ごせる可能性を模索し
たかった。

屋内に入ってすぐの部屋は真つ暗だった。

何か大きな空き缶のようなものを蹴飛ばしてしま

い大きな音がした。家の中の住人に気づかれやしなかったかと冷や汗をかく。静かだ。まだ見つからないようだ。痩せた胸を撫で下ろして壁に手をつく。

次第に目が馴れてきた。

自分はようやくやら台所にいるらしい。壁沿いに流し台と、部屋の真ん中辺りに作業台だと思われる卓が見えてきた。

先ほど蹴飛ばしたのはよくある一斗缶だった。空き缶が足元にいくつも転がっている。足で除けると床で擦れる音を立てるので、踏まぬよう大きくまたいで部屋のさらに中へ入った。

一般の住宅の台所に見えた。自分は一般家庭の勝手口から家屋に侵入している。

油断はならないと自分に言い聞かせた。こういう隠れ家を持っている者などいくらでもいるだろう。勝手口を開け放ったまま留守にするはずがない。ま

して自分が入った次の時には一斗缶を蹴飛ばして大きな音を出してしまっている。そのうち人が来るかもしれない。

音を立てぬよう気を払いながら勝手口の戸を閉めた。少しでも距離を稼ぎたかった。

何と距離を置きたいのかは、自分でもよく分からなかった。

とにかく遠くへ逃げたい。

部屋の中が再び暗闇に包まれた。

その暗闇の中に何かを踏み締める音が聞こえてきた。

自分のものではない。勝手口ではない、部屋の奥にある戸の向こう側からだ。

誰かが近づいてきている。

少年は腰の後ろに手を伸ばした。ベルトに挟んで隠している冷たい金属のそれに少しだけ触れた。引き抜いてグリップを握る。重みがまだ華奢な手にの